35

道教と中国医学（第二十五回）
『功過格』

吉元昭治
吉元医院

魯迅は「人はしばしば坊主を憎み、尼を憎み、回教徒を憎み、キリスト教徒を憎むが、道士は憎まない。この理屈がわかれば中国の事は大半わかる」とかつて喝破している。道教は長い歴史のなかで民衆の間で支持され、浸透し、心のよりどころとなっていたし、医学、技術、文學、美術などあらゆる方面に影響を与えてきた。この道教も其の純粋の部分の教会道教（成立道教・教団道教・道觀道教）と、民間にあって存在した民衆道教（民俗道教・民間道教）という分類がとられていたこともある。後者に明清以後の三教合一（儒教・仏教・道教）の気運から民間信仰の形となって現在に及んでいる。我が国の地蔵や稲荷信仰を考えてみると身近にあって人々の願いや救いに手をさしのべてくれるということについては同じようなものである。

ところで、この民間信仰を蔭ながら支え、そのよりどころになったのに善書がある。先年の学会で発表した「太上威応扁」や、本年発表の「功過格」、さらに「陰隲文」「関聖帝君覚世眞経」などは古い善書で、現在でも華人社会ではいろいろな善書が存在している。寺廟や慈善団体に善書印刷出版の寄附金を奉納し、出來あがった善書を無料配布する。これが善行とされている。

『功過格』の「功過」とは、善と悪、功と罪といった意味があり、善悪の応報、懲罰の考えにすでに『周易坤』に「積善之家、必有余慶、積不善之家、心有余殃」とあり、さらに、『抱朴子　内篇』「対俗篇」に「地仙を欲せば当に三百善を立つべし、天仙を欲せば千二百善を立つべし」とあり、同じ「微旨篇」では竈神は月のみそかの日には天に昇り人の罪状を報告し、その罪が大ならば紀（三百日）、小ならば算（三日）の命を奪うとある。これらは皆、善悪の報いが必ずあることを説いていたのである。

功過を具体的に点数化、定量化したのが『功過格』といわれる一群のものである。

これは日常の行篤を『功過格』に照し合せ十と一に、毎日三百六十五日、功（十）と過（一）欄に記入し自己採点を行い、月末、年末に総点数を見る。この善悪、大小、軽重によって神が禍福を下すと信じられていた。

この「功過」の風はすでに宋代にあったとされるが、『正統道蔵』の中に「太微仙君功過格」がある。金代、又玄子選によるもので大定十一年（一一七一）、たまたま神仙境に夢の中で出かけ、そこで太微仙君（太微天帝、太微玉帝君）に会い礼拝し「功過之格」（格とは標準という意味）を授り夢がさめてから書いたという。

本書は南宗浄明派のものとされているが、功格三十六條（救済門十二條、教奥門七條、焚修門五條、用事門十二條）、過格三十九條（不二門十五條、不善門八條、不義門十條、不軌門六條）に分かれている。「依此行時、遠悪遷善、誠為眞誠、去仙不遠矣」とも記している。

重要なのは巻首の救済門の中に「符法、針薬で重病のものを治せたら十功、普通の病気なら五功、病家から賄賂を受けたら無功、薬を与えて功があれば一功」などとある点である。『功過格』では最も古いものである。

『道蔵輯要』『蔵外道書』の中に『十戒功過格』がある。孚佑上帝純陽呂祖天師の啓示によるものとされ、柳守元（清初の人）の題詞がある。殺・盗・淫・悪口などの十戒が記され、各々に過罰がある。この中に「医術に通ぜず寒熱・攻補の法を間違えて人を殺したものは五十過である」「いんちき薬で人を殺したものは五十過である」「医術に精通し危症を治した者は五十功、重症は二十功、大病は十功、軽症は五功」などという記載もある。我が国にもこの考えはもたらされ、江戸時代『和字功過自知録』『陰隲功過自知合雙論』『和語陰篤録功過自知録大意』などがあいついで出版されている。なお総会では台湾などのこの部分の善書も紹介したい。